

神泉苑しんせんえんは上古封境ほうけい広くして、二条の南、三条の北、大宮の西、壬生みぶの東、敷地しきち八町の間なり。天子遊覽しんせんの所、乾臨閣けんりんかくを正殿とす。巨勢こせ金岡石を置むといふ。「拾芥抄」大内裏はじめて造営ありし時は、周文王しゅうぶんわうの靈囿れいよくに准じて方八町に作られし泉苑せんえんなり。此池こゝより善女龍王ぜんによりりゅうわうあらはれしより神泉しんせんとも号なづけ、又其めぐりを洛中に課なづせて柳桜を多く植うえられたり。弘仁三年如月には、帝みこ、に行幸みゆきありて觀花の御遊あり。文人ふみひとおのゝ詩を賦ふし禄を賜ふ事差しなあり。「類聚国史」花宴節会けんかいこゝに始はる。貞觀十三年十一月鳳凰乾臨閣ほうわうけんりんかくのひがし鷓尾くつがたの上に集じまる。「三代実録」又神泉苑しんせんえんに於て御靈会おこなわを執行せらる。是日苑の四門を開いて、都の貴賤を出入し縦觀する事を聴ゆるし、又菊宴きくのえんには女楽を南の灌殿たきどのに奏し、盃をめぐらし、舟に乗じ、渡つて閣前あかくの幄あくに就て楽を奏す。「内裏式」相撲会には、少納言大舍人なごんおほとねりと共に東の灌の上の橋頭に候す。又貞觀十八年六月には、疫神えきしんを神泉苑しんせんえんに送る、是紙園会はしまりの濫觴はしまりなり。初春の左義長は、真言院しんごんいんよりこゝに出して焼上たきあるなり。此時法成就池と囃す。弘法大師こうぼうは善女龍王ぜんによりりゅうわうを祈りて請雨の法を行ひ、天下早魃かんぱつの愁うれひを扶たすて叡感かうむを蒙かる。小野小町をのこまちも和哥わがを詠じて雨を降らし、鷺さぎは宣旨せんじを奉うけて五位の爵を賜ふ。白河院御遊の時、鵜うをつかはせて叡覽あまたたびあるに、鵜池うの池中に入て金覆輪かみふりりんの太刀を喰へて上る、すなはち銘を鵜丸うのまるとなづく。其外代々の帝行幸ありし事数回あまたたびなり。中頃明德応仁の兵燹へんげんに罹あつて今は僅わずかの林泉となる。しかはあれど大内裏の遺跡千載の賜とぞ思はれける。

本朝文粹 冬日ふゆ於て神泉苑しんせんえん。同賦どうふ葉下風枝疎はじま。

源 順

神泉苑しんせんえん者禁苑きんえん之其一也。紅林地こうりんち広。吞のみ楚夢そむ於胸中むねなか。縁池水高えんちすゐたか縮ひぢ呉江ごかう於眼下がんげん。戸部省侍郎こべのしょうじやう以下。倫取りんしよ暇あま予われ于其

間一。蓋亦禁二漁釣一。不禁二吟詠一也。觀夫葉隨レ風下。枝逐レ日疎。梧楸影下。一声之雨空灑。鷓鴣背上數片之紅

纔殘。蕭々然。颯々然。誠足三以感二。耳目一者也。于レ時短晷已傾。長庚將レ出。以レ文会レ友。暫雖レ携二風月之遊一。

退レ食自レ公。飽難レ玩二林池之妙一恨。來暮。而去早。請乘レ興以遣レ詞。云爾

經国集 和_ス下海和上_ノ秋日觀_ニ神泉苑_一作_上

滋 貞 主

閣梨下_レ自_ニ南山_ノ幽_ニ勅許_{シテ}令_レ看_ニ上苑_ノ秋_一御路蕭疎。楊柳影遵行直到白沙洲廻瞻肅殺。無_ニ紛濁_一眼沸_ニ清泉_一細流小嶺

登攀_{シテ}頻見_ニ驚暗林_ヲ払入_テ欲_レ驚_レ鳩_ヲ三_ニ明湿_ス照_レ龍池_ヲ閣平道_テ重迎_フ秋薰樓法侶相_ニ隨_ス喜樹下_ニ不_レ殊_三昔与_二大比丘_ト

年中行事歌合 ちはやふる神の泉のそのかみや花をみゆきのはじめ成けり 宗 時

つれく草 さぎちやうは正月に打たるきちやうを真_{しんごんあん}言_{しんせんえん}院_いより神泉苑へ出して焼あぐるなり、法成就_{はふじやうじゆ}の池にこそとは

やすは神泉苑の池をいふなり。